

# スナメリが導く環境教育

## - 小倉北区藍ノ島小学校における環境教育の実践と実態 -

名越 章博

北九州大学文学部人間関係学科

### 目次

はじめに	
第一章 藍の島の概要	
第二章 藍の島のスナメリ	
第三章 藍の島小学校にスナメリがやってきた	
第四章 観光資源としての試み	
第一節 スナメリウォッチングをはじめた二見氏	第三節 スナメリウォッチングの課題
第二節 スナメリに関するデータ収集	第五章 スナメリ学習がもたらした変化
	第一節 藍の島小学校の環境学習
	第二節 周囲の人々の変化
	第三節 スナメリ学習の課題
	第六章 結論
	参考文献

### はじめに

藍ノ島は小倉近郊に浮かぶ小さな離島である。この島の周辺の海域では、現在環境庁のレッドデータブックに登録されている小型のハクジラ的一种、スナメリが昔から島民の間で目撃されてきた。しかしこれまでほとんどの島民がスナメリに関心を払うことはなかった。

今、この島にある唯一の小学校、藍ノ島小学校において、スナメリを核に据えた環境教育が行われている。児童たちが主体となった学習活動は島民や観光客の環境意識に影響を与え、島全体を巻き込むものになりつつある。

本稿では藍ノ島小学校の環境教育の中心であるスナメリ学習に焦点を当て、筆者自身がいくつかの活動に直接参加することで行った。同時に児童や保護者へのアンケート調査、ならびに島民や観光客にインタビューを行った。その結

果、スナメリ学習が人々の意識にもたらした変化と、スナメリを題材とした環境教育が成功した理由が明らかになった。

### 第一章 藍ノ島の概要

藍ノ島は北九州市小倉近郊の響灘に位置する離島である。島は小倉の北北西約 16 km に位置し、干潮時の海岸線の総延長は 18.4 km にもおよぶ(吉永 1960)。

島への唯一の交通手段は、砂津港から一日三便出ている定期船「小倉丸」で、約 30 分の航海を経て島に至る。島には世帯数 123 世帯、人口 323 人の島民が暮らしている(H12・9・30 現在 北九州市住民基本台帳より)。人口は減少傾向が続いており、若者の島離れが進んでいる。

観光シーズンである夏には 2 万人に近い人々が訪れる(日本離島センター 1997)。観光客の多くは福岡県内、地元北九州市からやって来て

いる。

島民によると、藍ノ島は昔、「宝島」と呼ばれるほど水産資源に恵まれていたらしい。しかし近年は水揚げが減ってきているという。その原因として、海の汚染、乱獲などがあげられている。

藍ノ島漁業組合で聞いた話では、現在 20 代の働き手が少ないため漁業の先行きは必ずしも安泰ではないとのことであった。「これからは島も漁だけの収入に頼らず、観光開発の方にも力を入れていかにやあならん」という話も聞いた。

藍ノ島は自然が豊かである。夏場には島の子供達や海水浴客が泳ぐ姿を目にすることができる。北九州市の他の地域ではなかなか見ることのできないルリハコベという植物や、国の天然記念物に指定され、準絶滅危惧種に位置付けられているカラスバトを見ることができる。

そして島の近海では絶滅危惧種として、環境庁のレッドデータブックに登録されているスナメリが生息している。藍ノ島小学校ではこのスナメリを始めとした地域の自然環境に注目し、スナメリ学習を核とした自然体験学習をすすめている。またこのスナメリを観光資源として利用し、スナメリウォッチングを企画している人がいる。

## 第二章 藍ノ島のスナメリ

つづいて藍ノ島におけるスナメリの特徴、ならびに漁師を中心とした島民や島を訪れる観光客のスナメリに対する意識を、インタビューや藍ノ島小学校児童の保護者を対象としたアンケート調査を参考にしながら論述していく。

まずスナメリの生態的特徴ならびに生物学的な位置付けについて簡単に触れておく。

分類 スナメリ Finless Porpoise 科名 ネズミイルカ科 学名 *Neophocaena phocaenoides*。

スナメリは最も小柄なクジラの仲間である。体長は約 160 ~ 170 cm、体重は約 50 ~ 60 kg で寿命は 20 年くらいだと考えられている(環境庁 スナメリ研究ノートより)。スナメリの最もはつきりした特徴は背鰭がないことである。東部は丸く、くちばしはない。体色は全体に灰色で、腹側は背面よりやや明るい。

日本近海、中国の長江(揚子江)、アジアの沿岸と河口域にそれぞれ 1 種ずつ、全部で 3 種類の地理的亜種がある(A. マーティン 1991)。日本では仙台湾から、伊勢湾、瀬戸内地域、西九州などの 50 m 以浅の海域で多く見られる。瀬戸内海では、ほとんど全域でスナメリを見ることができる。とくに、水深が 40 m 以下の沿岸の浅い場所、島と島との間や、岬の先の流れが速いところなどで見られる(環境庁作成パンフレットより)。スナメリには地方によって様々な名前が付けられており、広島地方には「デゴンドウ」、「テングイ」、岡山地方には「ナメウオ」、「ボンサン」、などの呼び名がある。(環境庁作成パンフレットより) 藍ノ島においてはスナメリは島民の間で「ナメ」の愛称で親しまれている。

瀬戸内海の入口にあたる藍ノ島周辺では遠浅の海が広がり、関門海峡の影響で海流の流れも強く、多くの島が点在している。こうした点からも藍ノ島周辺の海域はスナメリが生息するのに適した環境といえよう。

藍ノ島では高台から双眼鏡で見るとスナメ

りが息継ぎをするために海面に出てくる姿が見られることもあるという。まれに定期船小倉丸の船上から海を泳ぐスナメリを見ることができる。筆者も実際に7月上旬、定期船の2階デッキから海を眺めていたところ、船から約50～100mくらい離れた位置を、5～6頭の群れで行動しているスナメリたちと遭遇することができた。

筆者は藍ノ島小学校児童の保護者を対象にスナメリの目撃時期、場所についてのアンケート調査を行った。それによると、島の周辺の海域でスナメリが目撃できる時期は、春から秋にかけてが多い。特に、6、7、8月の夏場付近に最も多く目撃されている。1日の時間帯別では、午前5時から8時にかけての船の運航が少ない早朝に最もよく見られるようだ。目撃されやすい場所は本村～白州灯台～瀬ヶ崎周辺から島の南西部付近にかけてが多い（地図参照）。「藍ノ島付近の海では親子で行動するスナメリを見ることが多い」と島民は話す。



1970年代後半に行われた調査によると、瀬戸内海全域にスナメリは住んでおり、その数は約5000頭と推測された。1999年6月の調査では約700頭にまで減少したと言われている（環境庁 スナメリ研究ノートより）。藍ノ島で見られるスナメリも、昔に比べると生息頭数が減少しているようだ。「昔はしょっちゅう船の後について来よった。あいつらは泳ぐのが速いからのう。今じゃ前ほどは見かけんようになった」という話に代表されるように、インタビューを行った島民の全てが、「昔に比べて見る機会が少なくなった」「頭数が減った」と答えた。頭数が減ったという事に対しては、「（スナメリを）見かけなくなったのは何だか寂しい。」という答えも中にはあったが、「ただ減ったとしか思わない」と特に何の感想も持ち合わせていない者が多かった。

減少の理由について聞くと、「昔に比べて島

の海が汚れた」「船の航路を作ったり広げたりするのに、海砂を取り過ぎてスナメリが住みにくくなったのでは」「餌となる小魚が少なくなった」「スナメリは海底にいるウミウシやナマコを食べるが、その数が減ったため」などの答えが目立つ。ちなみに環境庁の資料によると、スナメリは一般的に、魚、エビ、イカ、コウイカ、タコ、など多種類の生き物を餌としているという(環境庁作成パンフレットより)。アンケート調査による同様の調査でも、回答者の全てが「スナメリの頭数の変化は海の環境の変化と関わっている」と答えた。

一方で「現在、藍ノ島周辺の海では生息頭数の減少に歯止めがかかっているのではないか」という意見もある。「スナメリが昔のように船の後について泳いでこなくなったのは、船の性能等が変化したからである」と語る島民もいた。

ある漁民はあくまで推測の範囲であるが、と前置した上で「昔の船に比べて現在の船は速度が速くなり、エンジンが強くなると同時にエンジン音も大きくなった。好奇心は旺盛だが、半面臆病な面もあるスナメリは怖がって姿を見せなくなった。それでスナメリを見る機会が少なくなり、数が減少しているように思えるが実際はそうでもない」という考えを述べていた。また、アンケート調査の中にも、海でスナメリを見る機会が増えているという回答があった。

また「スナメリは漁の邪魔になる」という話も耳にした。「スナメリが魚を追いまわして漁の妨げになり、漁網に引っかかり網を破いてしまう」というのだ。

文献では、「スナメリはイカナゴなどの小魚を食べているが、スナメリに追われた小魚を食

べに、タイやスズキが海底から上がってくる。そのためスナメリが集まっているところでは、タイやスズキがたくさん取れるので、漁師はスナメリを大切にしてきた(環境庁作成パンフレットより)」と紹介されていたり、豊漁のシンボルとして「タイリョウウオ」と呼んでいるところもあるという。しかし藍ノ島では必ずしも好意的に扱われてはいないようである。

こうしたスナメリに対する意識変化の背景には漁業技術の違いがあるのかもしれない。近年は船の速度が飛躍的に向上し、魚影探知機などの漁業機器が発達したことにより、漁場を発見し確保するまでの時間が昔に比べて格段に早くなった。それに加え漁業技術の発達で海底の魚も容易に捕獲することも可能になった。漁の効率化、スピード化が進むことによって、昔は魚の存在を知らせてくれ、海底から魚を追ってくることで漁に役立ってきたスナメリが、今では漁の邪魔になっているということが考えられる。

島民に「スナメリに関心があるか。スナメリの存在はどういったものか」というインタビューを行うと、ほとんどの者が「関心が無い」「別に気にしない」「漁に関しても何の損にも得にもならない存在だから、ああ、いるな、ぐらいにしか思わない」という回答が返ってきたのが印象的であった。

### 第三章 藍ノ島小学校にスナメリがやってきた

藍ノ島小学校では1990年度から、「子供たちの身近な自然や文化、人、などの価値あるものの中から課題を見つけ、体験活動を通じ、子供たちが自分の考え、自分の力で表現し、そ

の問題の解決に向かうことが大切である。」という考えのもと、『児童たち生きる力』の育成をめざした学習計画案を立て「ふるさとタイム」の時間を設定し、地域に根ざした環境教育を進めている。そして、その核となる題材としてスナメリに注目している。

この章では藍ノ島小学校の概要を中心に、スナメリ学習が始まるまでの藍ノ島小学校における環境教育の実際と、スナメリ学習が始まったきっかけについて述べていく。

現在の藍ノ島小学校は児童数20名。教員は事務職員を合わせて10名である。調査時の2000年度卒業予定の6年生は5名、それに対し保育所からの入学予定児は2名と、児童数減少の傾向がみられる。児童数の関係から1, 2年生、3, 4年生、5, 6年生が同じ教室で学ぶ複式学級の形態をとっている。

教員は半単身赴任の形で学校敷地内にある職員寮で生活し、週末の土曜日に定期船で自宅に戻る。そして翌日の日曜日、夕方の便の定期船で再び島に戻る。任期は原則として3年であるが、中には自ら志願して、任期を延長する教員もいる。男性教員の中には何年も藍ノ島小学校への赴任を希望してきた者もいるという。同校の教務主任であり、スナメリ学習を進める中心的存在でもある朝倉教諭もこうした教員のひとりで、今年で四年目の任期となる。彼は「このような自然豊かな場所で、少ない児童数のもと、ゆとりを持った教育にあこがれる先生もいるのではないかと述べた。

藍ノ島小学校では昭和42年から、山と海の小学校の交流として八幡東区の河内小学校と交歓会を持ち、互いの学校を訪問するほか、小倉

北区の小学校が集う定期演奏会に参加している。また文化継承学習の一環として、平成4年からは藍島盆踊りの練習を開始するなどの行事に取り組んできた。

環境教育としては、1998年度まで「海をきれいにしよう」を目標に、「クリーン大作戦」と称し月一回の海岸清掃を行ってきた。しかし、こうした活動は教師から言われたままにゴミを拾う受身的な活動であり、児童たちは、何のために海をきれいにしなければならないのか、というその問題意識がないままに行動しているだけであった。「教師もただ一つの行事をこなす感覚だった」と朝倉教諭は当時を振り返る。児童達にもクリーン大作戦の話聞いてみると、「おもしろくなかった」「めんどかった」「楽しくなかった」という返事が多く、当時の状況をよく言い表している。

そのような閉塞的状况の中で1998年、定期船小倉丸の船内で赴任二年目の朝倉教諭は二見隆氏と出会う。彼は藍ノ島の漁師で、スナメリウォッチングを一人で始めた人物である。その頃、藍ノ島小学校では、学校のイメージキャラクターを児童に募集しており、それはイルカにほぼ決定していた。たまたま朝倉教諭がその話題を持ち出すと、二見氏は「それなら島にはスナメリという生き物がいる、イルカではなくスナメリに変えてみてはどうか」と話を持ちかけた。朝倉教諭はその話を聞くまでは藍ノ島周辺の海にスナメリがいることも、スナメリという名前さえも知らなかった。おもしろい話だとは感じたものの、その時はまだ環境教育に使ってみるなどとは考えもしなかったという。しかし、この出会いをきっかけとして急遽イメージ

キャラクターはスナメリに変更され、「ラウちゃん」が誕生する。そして小学校では昨年度からスナメリ学習が始まったのである。

さてここで、藍ノ島小学校のスナメリ学習について論を進める前に、いちはやくスナメリウォッチングに目をつけた二見氏の実践について述べておこう。

#### 第四章 観光資源としての試み

##### 第一節 スナメリウォッチングをはじめた二見氏

第三章で紹介したように、藍ノ島にはスナメリに観光資源としての可能性を見出し、観光客を相手としたスナメリウォッチングを企画している二見隆氏という人物がいる。彼の本業は漁師であり、漁の合間を縫ってスナメリウォッチング、シーフードバーベキュー、定置網起こし体験などを来島する観光客相手に行っている。

スナメリに対し関心の薄い島民の中にあって、彼はスナメリに強い興味を示し、スナメリを通じて島の観光開発、地域振興を考えている。スナメリ学習が始まってからは藍ノ島小学校とも密接なつながりを持っており、授業でのスナメリウォッチングの際には自ら無償で漁船を出して協力をしている。

このように藍ノ島のスナメリを語るうえでは、二見氏の存在を抜きにすることはできない。そこでこの章では、筆者が平成12年12月に行ったインタビューをもとに、彼のスナメリに対する考え、スナメリウォッチングの実際、観光開発と地域振興への思いを見ていきたいと思う。

二見氏がスナメリウォッチングを始めるようになったのは、四年前の1997年に潜り漁

で体調を壊し、代わりの仕事を思案していた中で、バーベキューに来ていた客をたまたまスナメリウォッチングに連れて行ったことがきっかけだった。彼がスナメリウォッチングを始めたのは全くの偶然であり、減ってしまった収入を補うためのものに過ぎなかった。また、当初は他の島民と同じように、スナメリを見ても特に関心を示さなかったし、興味を持つようになっても純粋に観光目的のためであった。それが藍ノ島小学校と関わりを持つようになってから、少しずつ彼の中で考えが変わってきた。

そして第三章で述べたように二見氏が朝倉教諭と出会う事で藍ノ島小学校のスナメリ学習が始まることになる。

「今までやってきたことや、スナメリを通して海の環境うんぬんということ子供達と一緒に勉強したら、今のままじゃいけないということが少しずつ分かってきたんですよ」

二見氏は、スナメリという貴重な動物、そのスナメリが住んでいる藍ノ島の海がいかに美しく豊かな海なのかということに気付くことによって、しだいに島民にもそのことを意識して欲しい、知って欲しいと考えるようになった。

「子供達がこう、成長するにつれて島の外に出で行ったりした時に、自分達の島はこんなところですよって自信を持ってアピールできるようになったらいいんだけどね」

これらの言葉からも、スナメリを通じて自分達の郷土に愛着と誇りを持って欲しい、という二見氏の子供達に対する願いが感じられる。二見氏には子供がいない。そのため子供に対する思いや期待は強いものと考えられる。

観光客は春から秋にかけての主に週末、祭日



を利用して二見氏のもとを訪れる。年間の客数は約250～300人くらいである。主にシーフードバーベキューを楽しみに来る客が多く、スナメリウォッチングだけ目当てに来る客はあまり多くない。特に夏場にスナメリウォッチングに出る回数が多い。ウォッチングにかかる金額は大人3000円、小人(3歳以上小学生以下)2000円である。定期船の到着時刻に合わせて船の出発時間を調整し、1回のウォッチング時間は約1時間半から2時間。ウォッチングポイントは決まっていて、藍ノ島と白州灯台の間である。スナメリとの遭遇率は9割にのぼり、今夏では95%に近い遭遇率であった。スナメリが船の後ろをついてくる時間はおよそ10分から15分程度。スナメリウォッチングなどの宣伝は自作のチラシと砂津港に設置してある看板のみである。

## 第二節 スナメリに関するデータ収集

二見氏がスナメリウォッチングを観光向けとして実現するまでには多くの試行錯誤とデータ収集があった。

彼が学校を卒業して島に帰ってきたのが1973年のことである。当時、彼が毎朝船に乗って定置網を起こしに行く途中、5月から10月ぐらいの間には、白州灯台と藍ノ島の間でスナメリが船の後ろについてやってきていた。この記憶がもととなって、朝、スナメリがえさを探している時に姿を見せる場所を見つけた。そして例えば白州灯台～藍ノ島間ではスナメリの姿をよく目に見ることができるのは9時過ぎから日中にかけてであるということなどが分かってきた。

こうしたデータ集めはすべて二見氏自身の

経験の積み重ねによるものである。始めの頃は、やみくもに船を走らせて、スナメリの姿を発見したらすぐに船を寄せていた。しかしスナメリはこちらに興味を示さず一向に船の後をついてこない。すぐそばで船を止めると、スナメリに警戒され海に潜って逃げられる。さまざまな試行錯誤を繰り返した末にスナメリの行動が少しずつわかってきた。そして船を直接スナメリのそばに寄せず、船の速力を人間が走る程度の速さに下げ、船のエンジンの回転数を目安にスナメリがいる周りをゆっくり円を描くように回ると、船の側方や後方からスナメリが現れ、後をついてくることを発見したのである。今ではこの方法に加え、時間帯ごとによる出没ポイントの変化も分かり始めた。こうしたデータの蓄積が9割を超える高い遭遇率を生み出しているのである。

## 第三節 スナメリウォッチングの課題

二見氏は将来のことを見越して島の観光開発に積極的に取り組むべきだと考える。養殖や中間育成に取り組んでいるものの、島の漁業による水揚げ高は、以前の半分近くにまで減少し、それに加えて輸入品の魚が市場に出回っているため水産物の単価が落ち込んでいる。

「これからは島民一人一人がより積極的に地域振興に目を向けていくべきところまできているのではないか」彼は島の5年先、10年先のことを見越すと、観光の一つの可能性としてスナメリを生かすことができるのではと考えている。

先ほどスナメリ観光について語った二見氏は「うるおい」という言葉を使った。

筆者が「スナメリウォッチングは金銭的に儲かるものなのか」と氏にたずねたところ、「全く

割に合わないよ」と笑った。二見氏の本職は漁師であり、今のところその片手間にウォッチングをしている状態である。スナメリのことを調べてばかりでは生活ができない。しかしそれでも彼はスナメリウォッチングを続けている。

「保護動物を観光の目玉にするのは良くないと言われるかもしれませんが、目の前に北九州の工業地帯がずらっと並んでいて、昔は死の海とまで言われた洞海湾がすぐ近くにあるこの島に、スナメリという貴重な動物がいるよということを皆に知ってもらいたいですよ。そりゃ、当初はそんなこと考えなかったし（スナメリを）ただの観光材料ぐらいにしか思わなかった。でも今は昔と考え方ちゅうのが自分の中でも変わってきてると思うんよ。上手くは言えないけど、スナメリがすんでいる島の海を大切にしなければいけないとか、前はお客さんに、島はなんも見るとこなんかなくて言ったりしたけど、今じゃあそんなこと言わないしね」

2001年夏に開催される北九州博覧会において「関門スナメリの会」の企画で、会場の傍から二見氏がスナメリウォッチングの船を出すという案が提案されている。これが一つの転機になるだろうと二見氏は語る。

二見氏はその話の随所でスナメリに関わった事によって生まれた様々な出会い、自らの環境や郷土に対する思いの変化を強調していた。「出会いというものは本当に分からない」と二見氏は言う。朝倉教諭も語っていたように、離島での生活は地域の人々との強い絆を築く反面、ともすれば多くの価値観に触れることができず、偏った価値観、物の見方を持ってしまいがちである。二見氏はスナメリを通じて島内外に多く

の人脈を持つことができた。そして、島の外に目を向けることで、あらためて藍ノ島という自分が育ってきた郷土がいかに豊かな自然に恵まれた可能性を秘めた島であるかということを確認するきっかけになったのである。

さて、それではこうした二見氏との出会いから生まれた藍ノ島小学校のスナメリ学習は、児童たちにどのような変化をもたらしたのだろうか。次章では再び話題を藍ノ島小学校に戻し、環境教育の実態とその成果について見ていこう。

## 第五章 スナメリ学習がもたらした変化

### 第一節 藍ノ島小学校の環境学習

筆者はスナメリ学習に対する意識を分析するため、藍ノ島小学校の児童20名とその両親に対してアンケートを行った。その結果によると、スナメリ学習が始まる以前、児童たちは「スナメリの存在を知らなかった」「聞いたことはあるが学校のスナメリウォッチングに出かけるまでは実際に見たことがなかった」と答えた者が20人中16人を占めていた。

スナメリ学習、スナメリウォッチングは児童たちにも好評で、実際の活動では高い興味、関心を示している。児童たちの興味、関心を喚起したことによって、さらに児童たちは自らの力で貴重な動物であるスナメリを守るには何をすべきか、自分達には何ができるのかを考え、問題意識をもって行動し始めたのである。

1999年夏、初めて行われたスナメリウォッチングからの帰校後、6年生を中心に、縦割りのグループで今後の活動について話し合った。児童たちはスナメリのかわいらしさに驚き、自分達にできる保全活動を模索し始めた。そして



釣り客へゴミ回収のチラシを配ったり、海岸のクリーン作戦を行ったりと自主的な活動を行った。10月には5・6年生を中心に看板を製作し、定期船の待合所前に設置した。これが先に述べた看板である。島の環境を守る活動は今までも行ってきたが、このように進んで自分達ができる形で取り組むのは初めてだった。これまでではただ親や教師から言われて漠然と活動していたのである。しかし、今回のスナメリとの出会いは子供たちの感性を揺さぶり、「どうにかしなければ、どうにかしたい」という問題意識を喚起した。

このように1999年度は、藍ノ島小学校の環境教育の核にスナメリをおき、今までにない大きな成果を上げた。そして2000年度はスナメリ学習をさらに発展させ、さまざまな環境学習に取り組んでいくことになった。

2000年度は、昨年度スナメリに出会うことによって島の自然の豊かさを知った経験を生かし、それぞれの児童が興味を持った島の自然の素材を題材とし、スナメリ、鳥、花、虫、貝、漂着物の六つのグループに分かれ学習を展開した。教師は児童一人一人の学習計画をたてサポートに回った。これは少人数の学校だからこそ可能となった試みであるといえよう。必要に応じてその分野に詳しい講師を招き、全校で活動に取り組んだ。

こうした活動のいくつかには実際に筆者も参加した。その中の野鳥観察では、天然記念物であり絶滅危惧種に指定されているカラスパトを実際に見ることができたという。たまたまその時に児童の話で「あの鳥ならおじいちゃんが鉄砲で撃っていた」というエピソードが飛び出

し、先生たちを驚かせた。

漂着物調べでは、玄海灘の漂着物研究で有名な石井忠氏を講師に招いた。児童たちは海岸に打ち上げられた漂着物を調べ、これまでただのゴミとしてしか捉えていなかったものの中から、江戸時代のものと思われる茶碗のかけら、美しい桜貝、大陸からの漂流物などを発見した。自分が発見したものを「これは何だろう」「これは珍しいものだろうか」とわくわくしながら、同行した石井氏にたずねて回っていた児童達の姿が印象的であった。

スナメリグループはこれまでスナメリウォッチングに出かけた際に調べた成果を報告し、加えて文献などからスナメリの生態、スナメリを取り巻く瀬戸内海の実態を学んだ。スナメリをよく見る時期と魚の獲れ高の関係に興味を持った児童たちは、藍ノ島漁業協同組合をたずねその相関関係を調査した。12月上旬に開かれた学芸会では、訪れた人々に対しスナメリを守るために藍ノ島の海も環境を保全していく必要性を訴えた。

これら一連の体験学習活動を行うことで生まれた児童たちの意識変化が感想の中に現れている。「私達は昔からクリーン大作戦というゴミ拾いをしてきました。私はどうしてゴミを拾わないといけないか分からずに、ただ拾っていました。でもゴミを拾うことでスナメリを守ることができるということが分かって一生懸命ゴミを拾うようになったし、海にゴミを捨てては絶対にいけないと思うようになりました」

藍ノ島小学校が独自に児童たちを対象に行ったアンケートの中でも、「藍島を街の人に紹介しようと思います。島の自慢を書いてくださ

い」という問いに対し、多くの児童が、「藍ノ島の海にスナメリが住んでいる」「スナメリを見ることができる」と答えており、自分たちが生まれ育った藍ノ島とスナメリとが意識の中で密接に結びつきはじめているのがわかる。

しかし一方で、児童たちの話を聞いていた際、先生たちに対する不満も散見された。「去年は学習の計画や内容を自分達で決めたのに、今年は先生達が決めた。自分達で決めたかった」「先生たちは自分達の話聞いてくれない」「話は聞いてくれるし、興味を持ってくれるけど、もう少し自分たちの意見を聞いて欲しい」などである。

これら児童たちの意見に対して朝倉教諭は、「確かに今年は昨年ほどスナメリに関することは子供達を中心に自主的に活動できなかったかもしれない。そういうところで不満が出ているのは分かる。だが、六つのグループに分かれ、自分が調べたいと思うことについては自主的な活動ができていたと思う」という。

昨年はスナメリ学習が開始された年であり、児童たちにとっては目新しく、新鮮な学習であったはずだ。それに比べると今年のグループ活動学習は地味なものと感じられただろう。教師側としては現状に満足せず、新しい試みを進めていこうと考え今年の学習計画を立てた。この点で両者の間に小さな食い違いが生じ、結果的に児童達が不満を持つようになったとようだ。

しかし、見方を変えればこれらの先生に対する不満は、「自分達が中心になって学習を進めていきたい」という自主性の表れ、学習に対する積極的な姿勢、と考えることもできる。つまり、児童たちの自主性が教員側の予想以上に高まっているあらわれであるという見方も可能で

ある。

## 第二節 周囲の人々の変化

また、子供たちはスナメリの学習をすることで、周囲の大人たちに少なからぬ影響を与え始めている。保護者を対象にしたアンケート調査で「お子さんがスナメリの学習をすることで、スナメリに関心を払うようになりませんか」という問いに回答してくれたほとんどの保護者が「何らかの形でスナメリに関心を持つようになった」と考えている。具体的には「スナメリに大変興味を持っているようでビニール袋などのゴミを捨てたら、スナメリが餌と間違えて食べたりするのでいけないと教えてくれる」「関心は出てきた。そして昔に比べてずいぶん減ったことを痛感した」「学校を通じて関心が出てきた」「漁の行き帰りに注意しながら運行するようにしている」などという答えがあった。

こうした意見は学校教育と地域社会の分化が社会問題になっている現在にあって、非常に重要な成功といえる。子供が学校で学んでいる内容を保護者に伝えることで、学校と家庭の距離が近くなったのである。スナメリウォッチングでは漁船を出してくれる保護者の協力がなければ成り立たない。スナメリ学習は学校と地域の密接な結びつきがあってこそ可能なのである。

スナメリ学習は観光客にも影響を与えている。島を訪れた観光客に「藍の島にスナメリがいることを知っているか」と聞いたところ、「定期船の船着場にある小学生が作った立て看板を見てスナメリがいることを知った」という回答が多勢を占める結果となった。この立て看板は藍ノ島小学校の1999年度卒業生の、卒業制

作の一環として作られたものである。看板には「スナメリの住む海にゴミを捨てないで」という文面と絵が描かれており、スナメリの紹介がなされている。



はじめて島を訪れた観光客や、久しぶりに来島し看板を見たことが無かった者は、島内へ足を向ける前に、定期船を降りてすぐの場所にある待合所前の立て看板に目を止める。小学生達が作成した看板が、観光客に島の海にスナメリがいることをアピールしているのだ。

「島でスナメリが見られることをどう思うか」という問いに対しては、「スナメリはどんな生き物なの、クジラなの、イルカなの」「いるとしてもあまり見られないのではないか」「珍しい生き物なのか」「そんなのがいるらしいね」などと、スナメリのことをあまり知らない者や、関心を示さない者がいる一方で、「小倉のすぐ近くの海にこんな生物が見られるとは思いませんでした」「対岸には工場が立ち並んでいるのに、クジラの仲間が住んでいるのには驚いた」「スナメリは貴重な生き物なんですよ。そんなのがこの島の海にいたなんてね」という驚きと意外性を表明する者たちが多かった。

茨城県から久しぶりに北九州を訪れ、初めて

藍ノ島にやって来たという男性は「以前北九州を訪れた時は、公害都市というイメージが色濃く残っている状態だった。今回訪れてみると、海も空気もきれいになったなど実感できるし、この藍ノ島へ来て島の人からスナメリの話を知ったり、美しい海に潜ることを通じて、北九州の印象がずいぶん変わった」と語っていた。

観光客のなかはスナメリに興味を持たない者もいるが、多くの者たちは小学生が作成した看板からスナメリの存在を知り、それによって未だに残る北九州市イコール「公害都市」のイメージに変化をもたらし、自分たちが住む地域に残る豊かな自然環境を再発見することで環境意識を強めるきっかけを得ているのである。

### 第三節 スナメリ学習の課題

スナメリ学習にもいくつかの課題がある。たとえば年間四回のスナメリウォッチングで、いつもスナメリが見られるとは限らないということもその一つである。対策としては、餌付けをする、スナメリの声を録音しそれを流す、スナメリを寄って来させる、期間を狭めてスナメリが最も発見されやすい初夏から夏にかけて集中的に出かける、より多く学習時間を取りスナメリウォッチングに出かけるようにする、などが考えられている。自然が相手の学習であるため、こうした問題を避けて通ることはできないが、様々な試行錯誤からは逆に学ぶことも多いだろう。

また、これまでのスナメリウォッチングは、スナメリを発見、観察することが主であった。しかし、それだけでは学習が閉塞化してしまう。今後は一定の海域内でスナメリの頭数を調べ、

得た結果からある程度の藍ノ島周辺に生息するスナメリの数を調査してみるなどの、より具体的な学習が求められる。しかしその際に留意しなければならないのは、あくまで児童達のスナメリに対する興味、関心を大切にするという点である。

そして、3年目の2001年度のスナメリ学習の課題は「島からの情報発信に力を入れる」ということである。1999年度、2000年度とスナメリ学習を進めたことにより、学習の基盤が完成された。これからはこれまでの学習活動を島内だけでなく、いかに他の地域の人々に知ってもらうか、が重要になってくる。そのきっかけとして、朝倉教諭はホームページやメディアを通じての情報発信を試みたり、2001年7月から開催される北九州博覧際において、児童が自分達で取り組んできたスナメリ学習についての発表をする事を考えている。こうした情報発信を通じて、他の地域の小学校と情報交換、交流も深めることができる。

このように、スナメリ学習の情報発信は、離島に住む児童たちにとって外の地域との橋渡しとなる意味でも重要な試みなのである。

朝倉教諭に「児童たちに、地域、環境学習を通してどんなことを学んで欲しいか」と質問してみた。

「基本的には地域を好きになる子供になって欲しい。今やっていることはそのためにしよる。そのためにこちらで地域のどこに良さがあるかある程度抽出してやる。それが藍ノ島の海を泳ぐスナメリであり、今回グループに分かれて調べたことなんですよ。子供たちが、身近なものの良さ、身近にある価値あるものを感覚的に捉

える力を養うことが重要だと思う。身近な良さを感じる力を感性と言うんよ。感性を育むことによって、地域って良いな、藍ノ島って良いな。これは自慢できるぞと子供達が思えるようになるのが最終目的」

筆者がある児童の家族と「がぜとり」と呼ばれる簡単な漁に同行させてもらった際に、その男の子が船上でふと口にした言葉が印象深かった。

「ぼく、藍島に生まれてよかった」

## 第六章 結論

これまで述べてきたように、スナメリウォッチングを営んできた二見氏と朝倉教諭がたまたま定期船の中であったことによって、藍ノ島小学校ではスナメリ学習を中心とした地域、環境教育が始まることとなった。それまで児童たちは海岸の清掃活動をするにしても、「なぜ海岸をきれいにしなければならないのか」という問題意識を持つこともなく、教師から言われるがままになんとか行ってきた。しかしスナメリを環境学習の核となる題材に据えることによって、児童たちは「かわいいスナメリを守りたい。そのためには藍ノ島の海をきれいにしなければ」「自分たちに出来ることは何だろうか」という意欲的な姿勢を見せるようになるとともに、学習に対する問題意識を持つようになった。「自分たちで学習を進めたい」という気持ちは、時として教師たちに対する不満の形をとって現れるほど大きくなりつつある。学習はスナメリだけにとどまらず、藍ノ島全体の自然にまで視野を広げたものに発展している。しかし、あくまで児童たちが主体的に学習に取り組む姿勢を重

視し、スナメリ学習に立ち返ることによって児童に芽生えた問題意識を再確認させ、新たな学習に取り組もうとしているのである。

島を訪れる観光客は、児童が作成した看板を通じて藍ノ島の海の豊かさを知ることになる。そして自分たちが住んでいるすぐ近くの海、北九州の工場群が立ち並び、かつては「死の海」と呼ばれた洞海湾から幾ばくも離れていない海に、スナメリという貴重で珍しい保護動物が泳いでいる事実には驚き、感心する。それは、いまだに「公害都市」のイメージが残る北九州市の印象を変え、観光客たちの環境意識を呼び覚ますきっかけとなっている。

また、児童たちの学習活動は、スナメリに関して関心の薄い島民にも少なからぬ影響を与え始めている。子供たちがスナメリの学習をし、家庭に戻って学習の報告をすることで、漁を営む大人たちは今まであまり気にとめていなかったスナメリが豊かな海にしか生息することの出来ない貴重な動物である事を知り、昔に比べてスナメリの数が減少していることを実感する。そしてまだ豊かとはいえ、藍ノ島の海の環境が変わってきていることに気付き始めているのである。

藍ノ島小学校は、「離島にある小学校」という一般的には不利な状況を逆に利用することで、地域にある素材を活かし、児童たちの郷土に対する愛着を深める「感性の環境教育」を進めている。「藍島に生まれてよかった」とつぶやく児童の言葉がその成果を感じさせる。

藍ノ島小学校におけるスナメリ学習はまだ始まったばかりであり、これからさらなる学習活動の発展が予想される。僻地における学校教育

の在り方と可能性を広げつつある藍ノ島小学校の、今後の学習活動の展開と情報発信に注目していきたい。

#### 参考文献

- 吉永禹山 1958 『藍島・馬島』 門司郷土会  
藍島類字公民館 1960 『藍島』 藍島類似公民館  
中村穰徳 1980 『藍島資料』 藍島類似公民館  
江藤正美 1957 『藍島 - 野外調査第3集』 福岡学芸大学小倉分校地理研究部  
小倉市教育委員会社会教育課文化係 1960 『藍島』 小倉市教育委員会社会教育文化係  
Martin,R.Anthony 1990 粕谷俊雄 訳 1991 『クジライルカ大図鑑』 平凡社  
北九州市住民基本台帳 2000  
環境庁作成パンフレット『呼び戻そうスナメリ！ 守ろう瀬戸内海』  
環境庁瀬戸内海環境保全室作成スナメリ研究ノート 『スナメリ大好き！』